

人生の

道しるべ

あなたの悩みに答えます

森本あんり (国際基督教大学教授)

一九五六年、神奈川県生まれ。プリンストン神学大学院博士課程修了(P.H.D.)。著書に「反知性主義(不寛容論)いすれも新潮選書」など。

写真 藤藤宏

が、いますぐしたいという話にはな
っておらず、同棲どうせいもしていません。
ただ、彼女から最近、「友達の結婚
式に行ってきたけど、すごく素敵だ
った」など、結婚への思いを匂わす
(気にしすぎかもしれないが)話に
なることはあります。

彼女とはこれからも一緒にいたい
し、子どもも欲しいと思っていま
す。しかし、結婚という制度に縛ら
れることにどこか抵抗感があつて、
一歩を踏み出せません。

結婚生活がうまくいかず不満を抱
えている友人も身近にいて、結婚へ
のマイナスな印象がどうしても拭え
ません。それでも結婚に踏み出すべ
きでしょうか。

(大阪府、三十代、男性)

私も彼女も結婚願望はあります

彼女は二十代後半で、付き合つて
から四年ほどが経ちます。関係は良
好で、居心地が良く、彼女に対して
細かな直してほしいことはあつて
も、大きな不満はありません。

相談
彼女との結婚に踏み切れない

三十代前半の独身男性です。私に
はいまお付き合いしている女性がい
るのですが、結婚すべきかどうか悩
んでいます。

回答

Answer

前回と同じく結婚についての相談
ですが、今回はまだ結婚していない
若い男性からの質問です。

私は大学で日々学生たちと接して
いるので、じつはこの手の質問には
かなりの頻度で出くわします。学生
たちの年齢はこの相談者よりやや若
いですが、結婚への願望や不安や躊
躇ちよはほぼ同じで、むしろ定型的と言
つてよいほどです。

こういう相談は、深刻な顔をして
一人でやって来る場合もあります
が、もっと多いのは、学期末や卒業論
文の打ち上げでわいわいやっている
うちに、いつの間にか座がほどこけて
数人の輪になったようなときです。

ちょっと想像してみます。そうい
う場面で、つまり他の仲間も聞いて
いる場面で、この相談者が何となく
こんなふうに語り始めたとしてしま
う。

「自分は三十代前半で、彼女は二十
代後半。付き合つて四年、関係は良
好で居心地も良く、大きな不満もな
い。二人とも結婚願望があつて、こ
れからも一緒にいたいし、子どもも
欲しい……」

ここまで聞いたなら、もう輪のなか
で黙っている人はいないと思いま
す。オイ、それなら何で結婚しない
んだよ！ 何が不満なんだよ！ さ
つさと年貢を納めろ。

女子学生からは、「友達の結婚式
に行ったらすごく素敵だった」なん

て言われて、アンタどこまで鈍感な
の？ それとも鈍感なふりして何か
ごまかしてるの？ と突っ込まれる
こと間違いありません。

私もだいたいそんな気分です。終
わり。——つて、わざわざ相談コー
ナーに投書する意味がないようなお
答えで、すみません。でも、こうい
う個別状況の話になると、「専門家」
なんてそもそもでもないのではない
か、と思います。

そこで学生たちが私に期待するの
は、「結婚の善」じゆんじゆんを諄々じゆんじゆんと説いて聞
かせることです。それも、古代教父
の 아우グステイヌスアウグステイヌスが同名の書で説
いたようではなく、私自身の経験
からその素晴らしさを個人的に保証
してあげることです。

たしかに、自分の経験から言うと、私には結婚の善を論じる資格が十分にありそうです。

よく学生たちには、「結婚はね、若いときの情熱か、歳が進んでからの諦めか、どっちかだよ」と話しますが、大学院の一年目で結婚し、その後も長く学生だった私の場合は、極端な前者です。

それでもあのときに結婚できて、ほんとうによかったと思います。結婚への環境が相談者ほどに整っていたら、決断には何の躊躇もなかったでしょう。

過ぎ来し方を振り返ってみると、人生の祝福はみなこの結婚に始まっていると言えます。

でも、そんな話がいったい何の保ののです。

自分の愛に自信がもてない。長い人生だから、途中で心変わりするかもしれない。別の人を好きになるかもしれない。だから最後の一步を踏み出せない。

もし相談者がそんなふうに考えて躊躇しているのなら、あなたは救いようのないロマンチストです。なぜなら、将来の自分の心がどう動くかなんて、誰にもわからないからです。学生たちは決まって私に聞きま

す。どうしてそんなに自分の愛に自信がもてたのですか。生涯を通してこの人を愛し続けるって、どうしたらそんな確信がもてるのですか。当時の私に、そんな確信があったかどうかわかりません。長い年月を

証になるでしょう。通販のお約束みにたいに、「※あくまでも個人の感想で、効能には個人差があります」と言うしかありません。

結婚は愛を守り育てられる

なので、もう少し一般的なお勧めもしておきます。それは、「結婚という制度に縛られることへの抵抗感」という、現代の若者に共通の感覚についてです。

結婚は、内面的な感情と外形的な制度の接合面で起きる出来事です。そして、現代人はこの関係に大きな思い違いをしています。役所へ届け出る紙切れ一枚に、いったいどれほどの重みがあるというのか。お互いの愛があれば、そんな手続きや形式

を経て振り返ってみれば、そう言うことができる。でも、初めからそれがわかっていてる人なんていないと思います。

だから人は結婚するのです。結婚という器のなかで、愛は変化し、成熟します。二人の関係は、いつまでも同じではありません。変化するから続くのです。

あなたは誤解しています。あなたがたの愛が結婚を支えるのではなく、あなたの愛を支えるのです。

これから直面するであろう幾多の困難に耐え、あなたがたの愛を守り育ててくれるのが、結婚です。だから結婚は善なのです。お二人の将来に、祝福を祈ります。

は不要ではないか。そう思う人も多いでしょう。

たしかに、二人の愛が限りなく純粹で強いなら、結婚なんて必要ありません。

でも、人間の愛はそんなに純粹でもなく強くありません。そしてあなたは自分でもそれを知っているのです。やがていつか、結婚が足枷あしづなになり牢獄ろうごくになってしまう日が来るかもしれないと。

よく考えてみてください。愛があれば結婚なんて不要ですが、かといって、愛がなければやっぱり結婚できないうでしょう。

つまり、結婚するのは、百パーセントでもないし、ゼロパーセントでもない、宙ぶらりんの愛の人だけな

投稿要領

日常の相談事や悩みについて、400字詰め原稿用紙1枚程度で、住所、氏名、年齢、職業を記入のうえ(掲載は匿名)、ご送付ください。掲載分には、図書カードを進呈致します。原稿は、内容を損なわない範囲で、一部を修整させていただく場合がございます。原稿は返却できません。掲載分は電子メディアや出版物などで公開する場合がございます。あらかじめご了承ください。

宛先

〒135-8137 東京都江東区豊洲5-6-52 NBF豊洲キャナルフロント11階

株式会社PHP研究所 Voice編集部 人生相談係

メールでも投稿を受け付けております。

voice@php.co.jp